

遊牧民の世界史

遊牧民の世界史

1

遊牧民の世界と中原とは、おそらく不可分のものである。古来、遊牧民の活動が中国の農耕民族に影響を与え、また逆にその影響を受けてきた。遊牧民といっても、彼らだけで自足できるわけではない。羊を引き連れて生活するために、タンパク質が不足することはないが、穀物は農耕民から手に入れるしかない。そのため、彼らは常に農耕民を必要とし、農耕民の方でも、馬という強力な機動力を必要としていた。それは、いわば持ちつ持たれつの関係であり、両者の間に厳密な境界線はなかったのだろう。

遊牧民は、人類の歴史を通して媒質としての役割を果たしてきた。農耕社会を石だとしよう。そうすると、遊牧社会は水である。農耕民は簡単に移動できないが、遊牧民は常に移動し続ける。

いま、二つの石があるとして、それらの間が真空で、熱を伝える媒質が存在しないとすれば、一方の石を熱しても、他方の石は冷たいままである。しかし、その二つの石の間が水で満たされていたならば、一方の石が持つ熱を水が運び、それが他方の石に伝わるだろう。そのように、水が存在することで、全体の温度を一定にしようとする傾向が生まれる。

遊牧民の働きはそれと似ている。それはもちろんそれ自体としても熱を持つものではあるが、ユーラシア大陸のいか所で生じた熱を、他の箇所に伝搬する媒質として機能してきた。彼らは中国で生まれた活動をヨーロッパや中東へ伝え、また、その逆の働きもした。そして、彼ら自身が文化を生み出し、ユーラシア全体にそれを広めることもあった。たぶん、世界は昔から一つだったのだろう。

2

中華文明は、中原だけで完結しているわけではなく、遊牧民との関係の中で発達してきた文明である。それは中国だけでなく、世界の他の地域にも同様のことが言えると思う。

中国最古の王朝殷は商とも呼ばれ、その名前は、それが商人の国であったことを示している。殷は黄河の中流域に位置していたが、そこは南北東西をつなぐ交通の要衝であり、交易の拠点として栄えていたと考えられる。北方のモンゴル高原からは馬や羊、南方の長江流域からは豊富な農産物、東方の満洲からは動物の毛皮や海産物、西域からは玉など、あらゆる文物が水陸の交通路を通じて殷に集まり、それらが盛んに取引されていた。

そのような活発な経済活動が富の集積をもたらしたが、それは必然的に争いを生む。商人たちは、自らの財産や商品を守るために街を城

壁で囲い、武装するようになる。その際、最も重要な戦力となったのが、馬である。騎馬部隊を用意することができた都市が、戦場においては圧倒的に有利であった。

おそらく古代の都市文明は、遊牧民の協力なしには築くことができなかったのではないか。それは周の王室が、西方の遊牧民とみられる姜の出身であったことから分かる。つまり、中原の商人の財力と、騎馬遊牧民の軍事力とが結合することで、中国文明は誕生したと言えるのである。遊牧の世界と農耕の世界は、昔から一つであった。それらは互いに影響を及ぼし合いながら、文明世界を形作ってきたのである。

おそらくこれと同様のことが、中東やペルシャの歴史でも起きているだろう。アケメネス朝の軍事力は騎馬部隊によって支えられていたと考えられるし、七世紀以降のアラブ人によるイスラム帝国の建設も、遊牧民の持つ軍事力と無関係ではないだろう。そのように、遊牧民の目から世界史を読み直してみれば、興味深い発見があるのではないだろうか。

朝鮮半島

1

太平洋は広い。広大である。その太平洋を挟んだ反対側にある極東において、アメリカの政治的な力が発揮されるということが、本当にありうるだろうか。

極東におけるアメリカの力は、本質的には日本の力である。日本が発揮する力に、アメリカという名札を貼り付けただけの、いわば産地

偽装商品である。

朝鮮半島の政治的な情勢を決定付けているのは、アメリカとソ連の対立、つまり東西陣営の対立ではなく、日本と中国のパワーバランスであろう。

2

歴史的に考えてみよう。そもそも、どうして朝鮮は独立国なのだろうか。中国との地理的な近さから考えれば、朝鮮半島は、山東半島と同様に、中国の一地方になっていてもおかしくなかったはずである。それが独立国であり続けたのは、中国と拮抗するだけの力が朝鮮半島の反対側にあり、半島全体が、その緩衝地帯として機能したからであろう。

七世紀の朝鮮は分裂状態にあった。北には高句麗、南には新羅と百済があり、互いに抗争を続けていた。その中で、日本と中国も半島の情勢に深く関わっていた。日本は百済と手を組んで新羅を襲おうとしたが、逆に唐と新羅の連合軍に返り討ちにされてしまう。いわゆる白村江の戦いである。

本当は、日本は高句麗と手を結ぶべきだったのだろう。高句麗が唐の国境を脅かし、その軍隊を引き付けている間に、日本と百済の連合軍で新羅を叩けばよかったのである。もちろん当時の通信技術では、そのような大規模な作戦は実行不可能だったのだが。

では、現代ではどうだろうか。現代で考えるならば、日本は、韓国をけん制するために北朝鮮と手を結ぶべきだ、ということになる。これは少し滑稽である。

朝鮮戦争の経過を眺めると、秀吉の朝鮮出兵と似ていることに気付く。秀吉の軍隊は、無防備な朝鮮に襲い掛かって、あつという間に戦果を拡大した。漢城・平壤などの主要都市を次々に制圧し、ほとんど朝鮮半島全域を平らげてしまったのである。しかし明の援軍が到着すると、秀吉軍は一転守勢に立たされる。その後、明・朝鮮連合軍に押されて日本側は慶尚道、釜山まで退却するが、慶長二年の再出兵で援軍が到着すると再び攻勢を強め、全羅道・忠清道まで兵を進める。この間の秀吉軍の動きは、朝鮮戦争における連合国軍の動きと、妙に似ているようである。

最終的に秀吉の病死によって日本側は撤退することになるが、もしも朝鮮出兵が続けられていたら、朝鮮は南北二つに分裂していたかもしれない。中国に支援された北と、日本の影響下に置かれた南である。しかし、事態はそう単純ではなかった。秀吉の侵略によって大損害を被った中国東北方面の防衛体制は、明そのものの弱体化もあって容易に回復されず、それが満洲族の台頭を許してしまう。やがて、この地域において支配的勢力となった満洲族が、明に代わって中国を統一し、清王朝が創設されるに至る。つまり、秀吉の朝鮮出兵は、全く意図しない形においてはあったが、世界史の流れに大きな影響を与えたと言えるのである。このパターンは、二十世紀初頭における日本とロシアの衝突の際にも繰り返されることになる。

話が逸れたが、要するに、朝鮮半島は様々な力のせめぎ合いの場である。北にはロシア・モンゴル・満洲があり、西には中国、東には日本・アメリカなど、様々な勢力の綱引きが行われている。その中でも、基調となっているのは中国と日本の影響であろう。ゆえに、日中関係が安定したものとなれば、その分だけ朝鮮の統一も容易になると考え

られる。

4

太平洋戦争における日本の降伏は、あまりにも唐突だった。日本は大陸から全面的に撤退し、そこに力の空白ができた。そのためアメリカは、日本の代わりに朝鮮に進出せざるをえなくなってしまった。日本人は、無責任にも朝鮮を放棄して、それをアメリカに押し付けたのである。この無頓着さが、問題を複雑にしている。

なぜ日本は降伏したのか。なぜ降伏できたのか。なぜ大陸における権益を、あつさりとは手放すことができたのか。日本の降伏は、真珠湾以上の奇襲だったのではないか。

5

ここに見られるのは、日本人に特有の、自立の思想というべきものかもしれない。それは、自分のことは自分でやれ、という考え方で、最近では自己責任という言い方もされるが、自と他を厳密に区別するような思考である。

これは、場合によっては無責任とも取られかねないが、他者への必要以上の干渉を嫌うという意味では、個人の自律性を尊重する立場と言うこともできる。つまり、朝鮮のことは朝鮮人でなんとかしろ、あとのことは知らない、という態度であり、一度は自分が干渉したことだから、最後まで関わりを持とう、とは思わないのである。

どうもそういう性質が日本人にはあるようだ。なんというか、情がない。どこか割り切っているところがある。

たとえば、仮に、太平洋戦争が起きずに、かつ、朝鮮における独立運動がさらに過激化し、日本政府が朝鮮の独立を認めざるをえなくなったでしょう。そのとき、朝鮮半島では何が起きたでしょうか。

日本の統治下で朝鮮の近代化は進み、社会の構造は大きく変化していたと考えられる。そのような状況で、急に朝鮮に自治権を与えられた場合に、平和裏に安定した政権を樹立することが、果たしてできたでしょうか。何らかの政治的な混乱が生じることは、不可避だったのではないか。このように考えてみると、朝鮮戦争には、内乱としての側面が少なからずあったのではないか、と思われるのである。

6

朝鮮の分断を東西ドイツの分割と比較する人もいるが、それは少し違う。ドイツは、自らが行った戦争の結果として分割されたわけだが、大日本帝国統治下の朝鮮人には、参政権はなかった。完全にとばっちりだったのである。

日本が朝鮮人に自治権を与えなかったことは、ある意味では正しかったと思う。朝鮮人は政治好きである。彼らが集まるとすぐに党派を作り、政争を始める。そういう性格なので、自治権を与えれば与えるだけ、独立運動は激しくなったはずである。ゆえに、限定的に自治を認めるくらいなら、いっそ独立させた方がよかった。そう考えると、降伏を機に朝鮮から手を引くことができたのは、日本にとって幸運だったのかもしれない。

朝鮮人は日本の統治に反発していた。一方で、実生活においては、日本の統治機構を信用してもいたのではないか。当時の朝鮮に自治はなかったが、秩序はあった。日本の降伏によって、その秩序すらも失われたのである。

日本撤退後に起きた朝鮮戦争は、逆説的に日本政府の統治能力の高さを証明している。日本の統治下では、あのような大規模な混乱は起きなかったからである。これは台湾についても言えるだろう。日本の統治システムは、堅苦しく非効率的ではあるが、秩序を維持するという点では優れていたと考えられる。ベストではないが、ベターではあったのだろう。

また、おそらく日中戦争に関しても、同じことが言えると思う。日中戦争を侵略戦争ととらえる人には理解しにくいかもしれないが、日本軍占領下の各地域は、政治的・経済的にある程度安定していたのである。それはむしろ、国民党による統治よりもましだった、という評価すらありうる。

太平洋戦争終結後、蒋介石は、徳をもって怨に報いるという方針を取って、日本軍の撤退に協力する姿勢を見せた。しかし、それは本当に正しかっただろうか。日本軍が撤退することで、蒋介石は共産党と正面から対決せざるをえなくなった。それまでは三つ巴だったのが、一対一の構図になったのである。むしろ蒋介石としては、日本軍を大陸にひき留めて、共産党への当て馬にするべきではなかったのか。無論これは机上の空論であって、実現可能性はなかっただろう。民衆から一定の支持を得ていた日本軍を追い出さなければ、国民党の権力を確立することも不可能だったはずだからである。

では、なぜ日本は撤退したのか。中国の民衆から支持されていたのだとすれば、そのまま中国に居座って、国民党や共産党と覇権を争うことも不可能ではなかったはずである。蒋介石はそれを危惧していたからこそ、早々に日本兵を帰国させることにした。おそらく、アメリカも同様の懸念を抱いていたはずである。

日本の大陸からの速やかな撤退は、大きな謎である。大陸に全く未

練がなかったように見える。それならば、はじめから大陸に手を出さなければよかったのに、とすら思われる。

多分このあたりに、日本人の戦略性があるのだろう。日本が大陸に手を出さなければ、いずれ他の列強にとられてしまう。そうなる前に我々が手を出しておくべきだ、という形の、相手の先手を取るという思考法が、日本を大陸へと引きずり込んでいったのである。ゆえに、そうしても自分の不利にはならないと悟ったならば、あっさりと手を引く。

つまり、あの時点で日本が大陸から撤退しても、もはや中国や朝鮮が植民地にされる心配はない、という判断があったからこそ、日本は降伏し、大陸から引き揚げたのではないか。アジアにおける植民地支配の根拠地は、日本軍の奮闘によって悉く破壊されていた。大戦終結時の状況から判断する限りでは、植民地支配の再開は不可能と言ってよかった。よって、それ以上大陸に居座る理由がなくなったので、日本に帰ったわけである。

しかしこれは、本質的に自分本位の考え方である。占領された相手のことなど全く考えていない。たとえばイギリス人などは、自分たちが支配していた植民地の人々に対して、ある種の愛情のようなものを感じていたはずである。我々が彼らを教育し、一人前の人間に育てなければならぬ、というような、人種的な偏見に基づいた歪んだものではあったが、父が子に対して抱くのと同じような感情があったように思う。一方で、日本人にはそういう感傷が一切見られない。自分は自分、人は人、という冷静な判断で動いていたのではないか。

朝鮮人はどこかで、日本に裏切られたと感じている。少なくとも、あのように唐突に、日本による統治が終わることなど考えていなかったのではないか。

これに関して、日本人は非人間的だ、という非難は当然ありうる。おそらく正しい非難である。実際、日本人は非人間的であり、非人情である。しかし、それも間違いではないと私は思う。

戦前の日本人の思考は徹底して戦略的であり、それは戦国武将の発想にも似ていた。ただ、彼らにとって勝手が違ったのは、相手が戦国的な思考を持っていなかったことである。日本人が経験してきた歴史を、中国人もアメリカ人も経験していなかった。その文化的なギャップは、いまだ十分に認識されているとは言えない。

我々は、実際にそうである以上に、相手を自分と同じ存在だとみなしていたのではないか。相手のことをよく知らないのに、知ったつもりになっていたのではないか。この混乱は、まだしばらく続きそうである。

7

朝鮮戦争の初期において、マッカーサーがなぜ、中国の参戦はありえないと考えていたのか、私には理解できない。そこには、深刻な自己認識の欠如があるように思う。

アメリカ人は、自分が侵略者であることを認識できていない。隣の家で無法者が暴れまわっているときに、自衛措置を取ろうとしない者がいるだろうか。アメリカが朝鮮戦争に介入した場合、中国が兵を出してくることは十分に予想できたはずである。

それができなかったのは、アメリカ人が常に、自分を善意の第三者だと思いついてからだろう。彼らは、自分たちは善意意図をもって行動しているのだから、その結果も善いものに違いない、と考えている。行為の意図と、実際の行為とを区別できていないのである。

どうやらアメリカ人には、まだ自我が芽生えていないらしい。自分の立場を客観的に認識する能力が欠如している。そして、そのために愚かな間違いを繰り返している。

べつに、侵略者であることは悪いことではないし、それを恥じる必要もない。ただ、自分が征服した地域において、善政を布けばよいだけである。為政者が誰であろうが、一般市民の生活とは特に関係がない。彼が善政を行うならば、それでよいのである。

西洋人がどうして侵略を恐れるのか、私にはよく分からない。恐れるべきは、侵略者ではなく悪人だろう。

宗教と歴史

1

文化の違いが相互理解を阻むということは、よくあることである。日本人の場合、戦争の巧みさで他の人々を評価するところがある。このあたりが、宗教的な人間には理解しにくいらしい。

キリスト教やイスラム教では、戦争や暴力を軽蔑するところがあって、そういう話をあまり好まない。ペルシャ人などは、昔はキュロス大王とかダレイオスとか、戦の上手い人がいっぱいいたはずなのに、今はそういう話をしたがないようである。多分イスラム教の影響だろう。

日本人がアメリカ人をどうしても尊敬できないのは、戦争が下手だからだと思う。日本的な感覚からすれば、真珠湾で一撃を食らった時点で、降参してもよさそうなものである。相手に攻撃されてから、怒り出して滅茶苦茶にやり返すというのは、まるで子供の喧嘩である。

子どもを相手に喧嘩を始めても、何の得もない。随分まずい戦争をしたものだと思う。

2

仏教は、イスラム教やキリスト教と比較されがちであるが、出自が全く違う。キリスト教などの一神教は、インドで言えばバラモン教に近い。暴力を忌避するという点でも似ていると思う。しかし、仏陀はバラモンではなく、クシャトリヤの出身である。つまり武人である。この点が、いままで見過ごされてきたように思う。

たとえばスッタニパータには、悪魔ナムチに誘惑された際の「負けて生き延びるよりは、戦って死んだほうがましだ」という勇ましい言葉が記録されている。こういう言葉は、バラモンからは出てこないだろう。仏陀は非殺生を説いたが、戦争そのものを否定したわけではない。このあたりは非常に難しいのだが、そう言っていると思う。

日本人の宗教は仏教である。しかし仏教は、一神教とはかなり異なる宗教である。そうすると、ある民族の文化というのは、その宗教の影響を強く受けるわけであるから、異なった宗教を持つ人々の間では、当然文化も異なる。西洋人は、戦争を軽蔑することが普遍的な価値観だと思い込んでいるようだが、全くそんなことはない。それは特殊な文化に過ぎない。

日本人にとって、戦争は文化である。なので、相手を理解するとき、その人々がどのような戦争を経験してきたのか、ということを知らねばならないと感じている。それが、人を測る尺度になっているのである。おそらく今でもそうである。

ヨーロッパにおける世俗的権力と宗教的権威との対立は、古くはインドにおいて、クシャトリア階級とバラモン階級の葛藤という形で現れている。クシャトリアは世俗的な権力者として民衆の上に君臨していたが、バラモン教の教義においては、バラモン階級に絶対的な権威が与えられていた。

ゆえに、バラモンの宗教には、彼らのクシャトリアに対する優越を保証する役割が求められていた。ありていに言えば、クシャトリアの仕事を貶め、バラモンの仕事を正当化することが必要とされていたのである。これはおそらく、ヨーロッパにおいてキリスト教が果たした役割と同種のものであろう。

そして、キリスト教がそうであるように、バラモン教も、胡乱なまじないや神の言葉に依存した宗教だったのである。仏教は、そういった伝統的な宗教の持つ非合理性を批判するところにその特徴がある。安易なごまかしや、どうしても取れるような曖昧な言い回しは否定され、事実を直視する誠実さと明快な表現が尊重されるのである。

現実の世界には、0と1のどちらかに決まっているものなどほとんどない。たいていの物事は、その中間にある。その割り切れない事実を、そのままに認識するということが、中道である。それを0と1のどちらかに無理やり当てはめようとするのが、極端である。バラモン教やキリスト教は極端の宗教であり、仏教は中道の宗教である。

近代科学は、ヨーロッパにおいて仏教と同じような役割を果たしてきたと言える。しかし、そこにはいまだに非合理性が紛れ込んでいる。たとえば、脳科学における意識の存在や、物理学における原子の存在などは、近代科学に含まれる不合理性の現れであると考えられる。

我々は、これを完成に導かねばならない。近代科学が仏教の代替と

なりうるように、その基礎から手を加えねばならない。

4

仏教は、インドにおいて忘れ去られたかのように考えられているが、そうではない。たとえば、インドにおいて広く見られる菜食主義は、仏教に起源を持つ可能性がある。仏教は、その名前こそ忘れられているものの、インドの文化に決定的な影響を与えてきたのである。

ヒンドゥー教はおそらく、バラモン教と仏教の混合である。ヒンドゥー教を、仏教と独立に発達した宗教だと考えることは間違いであろう。インドの歴史は仏教の歴史であり、仏教とバラモン教の格闘の歴史である。それはまた、先述したバラモンとクシャトリア、宗教的権威と世俗的権力の問題とも深く関係しているはずである。インドは現在においても、本質的に仏教の国である。インドの文化的な環境は、仏教によって決定付けられている。

しかしこれは、これまで現代人がインドについて抱いていたイメージとは、全く異なるものであろう。インドにおける仏教の役割を強調することは、仏教徒の手前みそなのではないか、と思われるかもしれない。

しかし、そもそも我々のインドに対するイメージは、現代のインド人、つまりヒンドゥー教徒によって作られたものである。したがって、彼らの主張を鵜呑みにすることはできない。なぜならば、自分たちにとって都合な事実を隠している可能性があるからである。ジャーティやヴァルナの歴史に関するヒンドゥー教徒の主張を事実として認めることは、そのままその制度を固定化することにつながりかねない。ゆえに、インド人によって語られるインドの歴史や文化は、すべて嘘だと考えるべきである。なぜならば、彼ら自身がその受

益者である可能性を否定できないからである。バラモンのやり口は非常に巧妙であり、その欺瞞を明らかにするためには、細心の注意が必要である。

インドはまだ解放されていない。我々は、インドを解放し損ねたのである。

ヨーロッパの近代史は、インドの古代史をなぞっているように見える。彼らが獲得した政教分離の原則は、かつてインドのクシャトリアたちが求めたものに近い。だが、それは釈迦の試みよりも不徹底である。政教分離の枠組みは、かえってバラモンの宗教を温存することになるのではないか。

バラモンの宗門は一つ残らず粉砕されねばならない。そこに妥協の余地はない。

最近の中国について

1

以前、上野の博物館で故宫博物院展というのをやっていて、見に行ったことがある。かなりすごかった。国宝級の文物が惜しげもなく公開されていて、圧倒された覚えがある。あれは中国そのものだった。故宮博物院が台湾にある意味は大きい。あれがある限り、台北は中国の首都だと言ってよいと思う。共産党が台湾にこだわる気持ちも分からなくはない。

2

最近の中国では、監視社会が進んでいるらしい。しかし、監視システムがうまく機能すればするほど、そのシステムの管理者の権限は大きくなるだろう。つまり、賄賂をもらい放題である。お前の息子がこういうことをしていたのを見たけど、上には報告しないでおいてやろうか、などと言って、いくらでもたかりができるわけである。

日本人と中国人では、賄賂や汚職に対する感覚が全く違う。中国の官僚は伝統的に、朝廷からあまり給料をもらわない。地方官は皇帝に命じられて任地に赴くのだが、給料は基本的に現地調達である。地元の有力量とコネを作ったり、その商売に協力したりして、自分で稼ぐしかない。

日本的な感覚からすれば、それは汚職と紙一重だが、中国ではそれが普通である。公権力のあり方が日本とは全く違う。なので、どこまでが職務の範囲で、どこからが職権の濫用なのか、判断が難しい。

そういう国で監視社会が発達するということは、結構恐ろしいことだと思う。それは、恐怖政治を生むというよりは、社会の不合理を助長するだろう。もしかすると、すでに民衆の不満は高まっているのかもしれない。香港で起きたような抗議活動は、中国本土の民衆の気持ちを代弁しているのではないか。

習近平の政権が安定しているために、かえって中国の内部事情が見えにくくなっている部分もある。いま、中国はどんなになっているのだろうか。

3

以前、香港のデモ参加者が、黒い服を着た男たちに襲われる動画が、ネット上に出回ったことがあった。私はあれを見て、妙に納得してしまった。中国の歴史を調べていると、文化大革命の頃に、都市部でさかんに武闘が行われた、という記述が出てくる。武闘とは何のことだろう、と不思議に感じていたのだが、あの動画で理解できた。

中国社会の本質は、個人対個人の終わりのなき闘争である。政治の場ではそれが最も顕著に現れ、物理的な暴力にまで発展する。おそらく、文革のころは思想の違いを理由に武闘が起きていたのだろう。一方で、香港の問題はもっと単純なもののようなのである。また、その規模も全く違う。しかし、中国という社会の本質は変わっていないのだなと思う。

中国社会を変えようと思うべきではない。民主化が実現すれば中国も変わるだろうとか、共産主義をやめれば変わるだろうとか、そんな単純な話ではない。中国を根本から変えようと思うならば、少なくともあと十世紀は必要である。そう簡単には変わるものではない。

戦前の日本人も同じ間違いを犯したのだと思う。彼らは性急に中国を変えようとして、結局戦争になってしまった。我々は、同じ轍を踏んではならない。

七三一部隊

1

森村誠一の『悪魔の飽食』には、関東軍七三一部隊の行った人体実験の様子が記述されている。しかしながら、この著作は元隊員の証言のみに基づくものであり、信憑性は低いと思われる。

もちろん、それが嘘だという証拠もないが、共産党の再教育施設に入っていた人間の証言を、そのまま信用することはできない。人の記憶を書き換えることは、それほど難しいことではない。

私の個人的な意見としては、この本の内容は百パーセント嘘である。ここに記述されたような残虐行為は、明らかに中国人の想像力の産物である。たとえば、盧溝橋事件の直後に起きた通州事件や、山東出兵のきっかけとなった済南事件の際に日本人居留民に加えられた暴行は、まさに『悪魔の飽食』を彷彿とさせるものである。中国人は、自分たちの残虐性を日本人の上に投影し、その話を元日本兵に信じ込ませた上で、帰国させたわけである。

なぜ、そのようなことが必要だったのか。そこには、日本人の倫理的な潔癖性が関係していると思われる。

倫理的な正しさは、人に苦痛を与えることがある。自分自身いろいろな間違いを犯しながら、それでも自分は善良であると信じて生きている人の目の前で、その人の過去の非行をあげつらい、それを非難す

るということは、時にどんな暴力よりも残酷である。日本人が掲げる倫理は、中国人にとっては暴力でしかなかった。そこには優しさが欠けていたのである。

中国人が日本に向ける敵意の裏には、彼らが抱えるやましさがあるのだと思う。

2

また、日中戦争の折、日本の北支方面軍が、中国東部を南下していた時のことである。日本軍が黄河流域にさしかかった時に、蒋介石は黄河の決壊を指示した。そのために、黄河流域に居住する数百万の人民が洪水の被害にあったが、けっきょく日本軍の進行を止めることはできなかった。しかしその後、洪水に起因する衛生状態の悪化によって、日本兵の間でコレラや赤痢が蔓延することになる。それによって、日本軍の作戦遂行能力を低下させることができたのだから、黄河決壊作戦には一定の戦術的な価値があった、という評価も可能である。

一方で、当時から、日本兵の間で伝染病が流行したのは、中国人による飲料水の汚染が原因である、という説があった。単純に考えれば、日本軍が利用するであろう井戸水に、赤痢患者の糞便を混ぜておけばよいのである。それも原始的な細菌兵器と言えるだろう。

このように考えると、当時の日本陸軍に細菌兵器の研究所があったことには、合理的な説明がつく。それは、敵による細菌攻撃に備え、また、積極的に細菌攻撃を仕掛けることを計画していたのだろう。しかしながら、細菌の軍事利用に関しては、中国人の方が進んでいたようである。

また、石原莞爾と七三二部隊の関係を疑う人もいるかもしれない。たしかに、関東軍参謀時代の石原が、防疫給水部を訪れたという記録

は残っている。ゆえに、全く関係がなかったとは言えない。しかし、彼の最終戦構想との間に何らかの関連を見出そうとするのは、むしろ過大評価と言すべきだろう。

それは、大陸における戦争遂行のために必要な機関に過ぎなかった、と私は考える。むしろ、戦争行為そのものは是非については、ここでは議論しない。また、彼らが行ったとされる人体実験の規模や方法についても、ここでは触れない。それは、私の不勉強のためである。

3

話は変わるが、欧米諸国における反捕鯨活動にも、似たような側面がある。

道徳を振りかざす人間には常に、道徳的なやましさが付きまといている。道徳を実践している人間は、自分自身で満足しているため、他人を非難しようとはしないものである。欧米人の鯨に対する禁欲的な態度は、彼らが過去に行った乱獲への反省であると考えられる。そして彼らは、日本人がそれに同調しないことに、恐れを感じている。

彼らは、現在における禁欲的な態度が、過去の罪を隠してくれると考えている。あるいは、それによって過去の罪をなかったことにできると、と思い込もうとしている。だから、我々が彼らに同調しないことに不安を感じるのである。日本人も一緒に禁欲生活を送らなければ、過去の罪を清めることはできない、という考え方である。

結局のところ、欧米人はいまだに呪術的な世界から抜け出せていない。過去のことは過去のことであり、それをなかったことにすることはできない。だが、それは現在とは関係のないことである。過去に間違いを犯したとしても、いま正しく振る舞えばそれでよい。いつまでも過去にとらわれる必要はないのである。

捕鯨に関して言えば、乱獲が問題なのであって、ほどほどに漁をする分には問題はない。日本人も確かに乱獲はしたが、それを反省して、今後は適度にやろうとしているのだから、それほど非難しなくてもよいのではないか。

4

最近反捕鯨活動も下火になってきたところを見ると、欧米人の警戒の期間も、終わりに近づいたようである。だが、禁欲を行ったからといって、罪が消えるわけではない。

業の力は尽きることがない。その報いを受け取ったときに、始めて業の力は消える。それまでは、禁欲しても何をして、業は消えない。いずれ報いを受けねばならない。

告白によって罪が許されると考える者は、後で告白をすればよいと考えて、平気で罪を犯すようになる。しかし、いかなる方法によっても罪が許されることはない。自分が犯した罪の報いは、自分で受けねばならない。これが宇宙の真理である。

5

むろん、日本人が鯨まで取り尽くしてしまうかもしれない、という危惧は正当なものである。我々はまず、水産資源の管理能力があることを、国際社会に示さねばならない。

日本周辺の魚が減っているのは、日本人による乱獲の結果である。これを是正するために、政府は厳しい漁獲量制限を設け、違反者を厳重に処罰せねばならない。そのためには、日本は民主主義をやめるべきかもしれない。

現在の日本が抱える問題の一つは、有権者と政治家の馴れ合いである。政治家は漁業関係者の票を集めるために、漁獲量を制限することをためらう。また、同じ理由から、助成金や振興費によるばら撒き政策が進められる。その結果として、本当に対処すべき課題が先送りにされ、漁業や農業を取り巻く環境は悪化を続けている。そして、そうした無駄遣いのツケを払わされているのは、若い世代の納税者たちである。若者は金を奪われ、さらに将来の環境まで奪われている。それなのになぜ、彼らは声を上げないのか。

それは、その手段を奪われているからである。右に述べた通り、いま日本が陥っている苦境の根本的な原因は、民主主義である。したがって、若者は民主主義をこそ否定しなければならない。一方で大人たちは、民主主義に反対する人々を周到に悪者に仕立て上げている。そのため、彼らの怒りは行き場を失っているのである。

しかし、私は宣言する。民主主義は日本社会の癌である。それは破壊されねばならない。

日本はもともと和を貴ぶ社会である。そのため、日本社会は民主主義との相性が良すぎるのである。日本が民主化された結果、和を貴ぶことの負の側面だけが強調されてしまった。それは、格差の拡大や既得権益の強化といった、現代社会の問題を根本において規定しているのである。

民主主義は徹底的に批判され、乗り越えられねばならない。それは、新しい社会のために我々が果たすべき責務である。

東条英機について

1

率直に言って、大東亜戦争の作戦指導は不可解である。

戦争の歴史を知る人なら分かると思うが、戦線を拡大するということは、常に危険なことである。戦線が伸びると、そのぶん一箇所に配置できる兵力が少なくなるので、敵に突破されやすくなる。とくに味方の兵力が少ない場合には、戦線をむやみに拡大することは禁物である。

いま、大東亜戦争における日本軍の活動範囲を見てみると、西はビルマから東はニューギニアまで広がっている。これは明らかに、戦線を広げすぎである。

なぜ、このような作戦を実行したのか。もしも私が参謀だったならば、こんな作戦は怖くて実行できない。そもそも普通の軍人ならば、こんな作戦は思いつかないし、思いついたとしても実行する勇気がない。これではまるで、裸のまま突撃するようなものである。

戦争目的から考えるならば、極東におけるイギリスの活動拠点を奪うために、シンガポールを占領する必要はあった。また、日本本土を防御するために、サイパンの占領も不可欠である。だが、それ以上に兵を進める必要はない。シンガポールからサイパンまでのラインを防御線にして、そこから先には兵を出さず、守りに徹するべきである。そうすれば、不敗の態勢を作ることできたかもしれない。

しかし、そうして守りを固めるためには、まず防御線の内側を安定させなければならない。防御線の内側でも別の戦争をしているようでは、とても守りに徹することはできない。そうすると、日中戦争の解決ということが、この場合は絶対条件となる。そう考えると、現実的

には、この案は見込みがない。つまり、日本には打つ手がなかった。どうやっても負けるしかない。そういう状況で、死中に活を見出すために何をすればよいのか。

おそらく、そのとき彼らが考えたことは、逆を張る、ということだろう。相手が全く予想していないことだけをやって、敵の不意を衝く、ということである。これは大博打だが、万にひとつでも勝ち目があるとすれば、それしかない。そういう考えがあったのではないのか。だが、そうすると、どうにも分らないことがある。それは、東条英機という人間のことである。彼は、そんな大博打ができるような人物だったのだろうか。

私が理解している限りでは、彼は堅実な人間である。気配りが細やかで、周囲の人間や部下からは慕われるが、独創的な意見を持つていくわけではない。ただ信念は強く、愚直な人間という印象を受ける。一か八かの賭けをしそうな人間には、とても見えない。

どうも彼は、軍事的な観点から見た場合には、あの戦争とは釣り合わないような気がするのである。もちろん、作戦参謀としての才能がなかった、ということはある。その点で、彼には抜けていたところがあったとは思ふ。しかし、それだけで済ませるには、あまりにも問題が大きい。いったい何が彼を支えていたのか。どんな信念が彼にはあったのか。

大東亜戦争には大義があった。大義とは、植民地の解放である。そして、その先にある平和な世界の建設である。その大義を世界に問うために、日本は、それを実行してみせる必要があった。東条の信念はここにあったのだろう。彼は日本の国体を信じていた。日本の大義を信じていた。それを疑うことなく信じ切っていたからこそ、その大義をそのままに実践してみせることができた。つまり、西はインドから

東はパプワまで、欧米の植民地を一つ残らず解放し、その事実をもって、日本の大義を世界に示そうとしたのだろう。まさに天晴れである。

2

ここで、戦争以外の選択肢はなかったのか、と問う人がいるかもしれない。基本的には、なかったと思う。外交努力によって問題を解決することに、日本政府は全力を尽くした。しかし外交というものは、常に相手がいる。こちらがどれだけ努力しても、先方にそのつもりがなければ、交渉は成立しない。

もちろん、アメリカ人や彼らに同調する人々は、アメリカ側に落ち度があった、ということを読めたがらないだろう。しかし、率直に歴史資料と向き合ってみれば、それは明らかである。戦争を望んだのはアメリカである。

日本は侵略国家だったのだから、その日本と戦ったアメリカの方に正義があるのではないか、という反論もあろう。いま仮に、日中戦争が、日本による侵略戦争だったとしよう。では、侵略戦争を行っている国に対しては、戦争を仕掛けてもよいのか。

もちろん、よくない。相手がどんな国家であろうと、戦争を始めること自体が犯罪行為である。それは、東京裁判において確認された原則である。したがって、日本が侵略国家だったからといって、日本に戦争を仕掛けてよい、ということにはならない。

しかし、先に仕掛けたのは日本ではないか、と言う人もいるだろう。実際には、戦争を始めたのはアメリカである。日中戦争が戦われている最中に、連邦議会において、中国への無制限の武器の貸与が認められた。それが日本とアメリカの戦争でなかったとしたら、いったい何なのか。それでもアメリカは、日本との友好関係を望んでいたと言え

るのか。もしも大統領がそう言ったのだとしたら、それは明らかに嘘ではないのか。自分を殺そうとしている人間に武器を貸し与える相手と、どうすれば友好関係を築くことができるのか。

戦争によらない問題の解決を拒んだのは、アメリカである。そのため、日本は戦争を始めた。我々は売られた喧嘩を買っただけである。

3

結果的には、それでよかったわけである。大東亜戦争は間違いではなかった。日本が掲げた大義は、ある程度、世界の支持を得たと言えるだろう。もしも、日本軍がシンガポールで進軍を止めて、スマトラやジャワ以东の島々を解放しなかったならば、今のような世界はありえなかったはずである。独立国家の集合体としての国際連合というものも、存在できたかどうか分からない。

大東亜戦争が示した政治的なメッセージは、世界中の人々に強烈な印象を与えた。なぜならそれは、口だけではなく、実践を伴っていたからである。ゆえに、あの戦争は政治的には成功だったと言える。では、東条には、政治家としての才能があったのだろうか。

多分なかったと思う。彼がどこまで計算していたのか、どこまで予想していたのか、それとも何も考えていなかったのか、私には分からない。だが、それでよかったのかもしれない。彼には、軍人としての才能も、政治家としての才能もなかったが、何を信じればよいかは知っていた。たぶん、それが最も重要な資質だったのだろう。

こういう人間が側にいてくれたということは、昭和天皇にとっても心強いことだったはずである。まだ経験の浅い君主には、石原莞爾のような曲者を使いこなすことは難しかったのだろう。

また一部では、日本は全体主義国家だったから、戦争に突き進んだのだ、という誤解があるようである。しかし、戦前の日本は全体主義ではなかった。大政翼賛会などの政治的な動きは、たしかにファシズムを目指すものではあったが、そうした試みはすべて失敗している。実際に日本が全体主義国家となるのは、太平洋戦争が始まってからだと思う。つまり、アメリカの脅威が出現することで、図らずも全体主義が実現されたわけである。日本は、戦前からすでに民主主義国家であり、自由主義国家であった。

戦前の日本は民主主義国家ではなかった、と思い込んでいる人が、なぜそう思い込んでいるのかといえ、日本が戦争を始めたからであろう。民主主義国家は戦争をしない。しかるに、日本は戦争を始めた。ゆえに、日本は民主主義国家ではなかった、という三段論法である。しかし、その大前提が正しいという根拠はどこにもない。

もしも、日本が民主主義国家でなかったならば、日中戦争は起きなかったであろう。参謀本部には、盧溝橋事件を局地的な戦闘で終わらせようと努力する人々がいた。一方で、戦線の拡大を画策する将校たちもいた。しかし、それ以上に、世論が戦争を望んでいた。それが決定的だったのである。民主主義は必ず戦争への道を突き進む。それは制御不能である。

では、ファシズムならばよかったのか。そうではない。そもそも法治国家であったことが問題である。法治主義ほど野蛮な思想はない。

アメリカは、フィリピンを一九四六年に独立させる、という約束をしていた。だから、あの戦争がなくても、フィリピンは独立していたかもしれない。しかし、それは仮定の話である。事実上、大東亜戦争が終わった後で、フィリピンは独立した。

彼らが約束を守ったかどうか、私には分からない。守ったかもしれないし、守らなかったかもしれない。アギナルドの例を見れば、守らなかった、という可能性も皆無とは言えないだろう。だが、どちらにしろ仮定の話である。

日本はアメリカを侵略したのであって、フィリピンを侵略したのではない。日本はイギリスを侵略したのであって、ビルマを侵略したのではない。日本はオランダを侵略したのであって、インドネシアを侵略したのではない。

我々は他人の間違いを正そうとしたのであって、我々自身の間違いを犯したわけではない。彼らが武力によって獲得した土地を、我々が武力によって奪い返していけないわけがあるのか。欧米人が日本の侵略行為を吹聴するのは、彼らの負け惜しみに過ぎない。

我々はアジア人として戦い、これらの土地をアジア人の手に返した。ゆえに、あの戦争は我々の勝ちである。

アメリカは、アジアにおける利権を求めて戦争を始めたが、日本はその試みを尽く退けた。ルーズベルトは、自分が敗北することを知らずに済んだわけである。

あの戦争に関して、一つだけ残念なことがあるとすれば、それは、日本軍と釣り合うだけの敵がいなかったことだろう。

東条英機は、自分の人生を信の一点に捧げた男だった。彼の信念と比べれば、ルーズベルトの肝っ玉は小さすぎる。そのために、日本兵の武者ぶりが十二分に発揮できなかったということは、返す返すも残念なことである。

だが、もしかすると、次の機会があるかもしれない。そのときには、世界中に天晴れと言わせてやれるだろう。

子曰、甯武子、邦有道則知。邦無道則愚。其知可及也。其愚不可及也。